

# 病の治療が身体観に及ぼす影響についての研究

——心移植者の体験を事例として——

医療法人財団千葉健愛会 あおぞら診療所  
友松 郁子

## 1 目的

心臓移植という治療を選択することにより、患者は治療という観点から自らの身体を認識することになる。これは、日常生活の中で慣れ親しんできた身体に対する認識とは異なるため、移植後の身体をどのように認識するかという新たな問題に直面する。本報告の目的は、心移植者が移植という治療選択と体験を通じて、身体という問題にどのように向き合っているかについて精査し、病の治療が患者各々の身体観に及ぼす影響について考察を行うことである。

## 2 方法

調査にあたっては、スノーボールサンプリングの手法を用いて、19名の心臓移植者をリクルートした。調査対象者は、20才以上の成人男女で、移植後1年以上経過していることを条件とした。半構造化面接手法を用いて、心移植を受けるという選択によってどのような問題に直面したか、その問題についてどのように対処したかという点に焦点を当てインタビューを行った。インタビュー内容を録音し、全て逐語的に書き起こした。その中から身体に関する語りを本研究の分析対象として抽出した。それらを、1)日本国内で移植を受けた心移植者、2)海外で移植を受けた心移植者（私費）、3)海外で移植を受けた心移植者（募金）の3グループに分類し、Thematic Analysisの手法を用いて分析した。

## 3 結果

分析の結果、以下の点が明らかになった。

- ① 心臓移植という治療選択に直面することで、‘心臓は個人を象徴する特別な臓器’という考えを患者自身が無意識のうちに持っていたことを自覚する。
- ② 心臓移植という治療選択を受け入れるために、‘心臓はポンプ’といった表現に象徴されるような臓器としての機能に焦点を当てた解釈をする。
- ③ 移植前、移植を受けて期間が短い間は、心臓と自分の身体を分けて捉える。すなわち上記②の視点に立った解釈が優位となる傾向があった。
- ④ 移植後は上記①の視点が優位になる傾向が強く、それは時間の経過とともに次第に強くなる。
- ⑤ ④と並行する形で、心移植者は身体の所有という問題に直面する。心移植者自身が‘心臓の所有者’なのか、それとも移植された心臓がその‘身体の所有者’なのかという問題に直面する。
- ⑥ ‘所有’の問題は時間の経過とともに変化し、移植後間もない期間は移植された心臓が心移植者の身体の所有者という認識が強く、一定の期間（5~10年）を経て、心移植者が心臓の所有者であるという認識を持つようになる。

## 4 結論

以上から、心移植者はその治療選択と体験を通じて、日常生活の中で慣れ親しんでいる身体に対する視点よりも、それとは異なる医学的説明に基づいた解釈を受け入れる試みが成されることが明らかになった。しかし、心移植者が本来持っていた身体観を棄却することは出来ず、それゆえに異なる身体観を受容するための再解釈が試みられ、心移植者個人の中でバランスを取りながら共存するようになる。